



「オットットットット」。
 きょうも「細川小ランド」から
 元気な声が聞こえてくる。

誰に教わるわけではないが、
 子どもたちは助け合いながら、
 器用に乗りこなしていく。

「次、やってみようか。」
 「ひっくり返ったらこわいよ。」
 「いいよ、ささえてやるから。」

登り棒、回旋塔、
 ファイルド・アスレチック等々
 遊具がいっぱいの
 「細川小ランド」で
 今、一番人気があるのが一輪車。

「オットットット」。
 よーし、うまくいったぞ。」

昭和55年 9月1日
 編集／発行
 岡崎市教育委員会

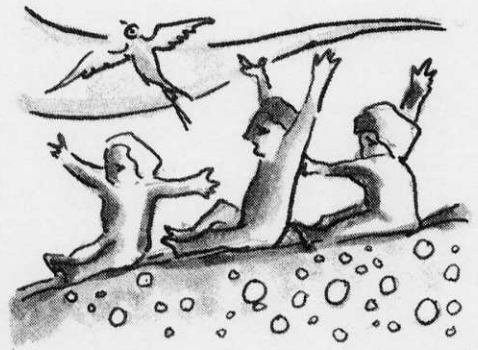


(挑 戦 — 細川小)

- 教育随想 -

患者と盆栽に教えられて

相馬 駿量



悠久たる矢作の流れと共に発展してきた岡崎に住みついて三十年を経過しました。

激動の一九八〇年代といわれますが、医療の面においてもまたしかり、重大な転換期にきていることをひしひしと肌にかけています。日進月歩の近代医学を取り入れて、地域医療の近代化にどれだけ貢献できるかが、今後の公立総合病院に与えられた使命でもありましょう。

病院では泌尿器科を担当しておりますが、毎日患者さんと接しております。患者さんに教えられることがあまりにも多いのに驚かされます。

教職の場でも可愛い子供達に教えられることが少なくないのではないのでしょうか。

多くの苦しみ、悩み、痛みを体験する

患者さん達の真実の訴えは、私たち医療

にたずさわる者の心をジーンとしめつけられます。そしていろんな名言や教訓が、つきつきに自然にとび出してくるのです。

二、三の例をあげてみますと、
一、先生、病院の中庭の小使小僧がうらやましくて仕方がない。

(前立腺肥大症)

二、今朝は自分の尿があまりにもきれいなので、手を合わせて拝んじやった。
(腎結核の若い女性で毎日尿が混濁している。)

三、入院後二日間、七転八倒の痛みで苦しんでいた尿管結石の若い男性が、三日目に自然排石し、けろりととして、「案ずるより生むが易し。」という名言を吐いて足取りも軽く退院していった。

など、あげれば限りがないが、こっ

た名せりふの数々は、真にせまっているが故に尊いし、ふんだんに聞けるのも我々臨床医の役得でもありませんか。

名せりふの出来ない中に、何とかしなければと思っても、そう簡単には参りません。これまで何千という手術をやっても、自分(患者にあらず)が本当に満足のできる症例は、おほずかしいがほんの数パーセントに過ぎません。

当然のことながら、また患者には色々文句もいわれます。

そこでひとつ草や木なら文句もいわんだろうと、数年前から鉢にいろんな草木を植えて見ました。(盆栽にあらず)驚いたことに、これがまた患者以上に文句をいうのです。

脱水、栄養不良、またはその逆、それから診断のつかない病気など、治療法も分らないまま枯れて死んでしまいます。

したがって、鉢植えの死亡率の方が患者の死亡率より断然高いのです。これではまだ、患者の文句の方が扱いよいのではないかと、今非常に悩んでいる現状であります。

この日帰ってみたら、また一本いかれていきます。ついに鉢ごとわが暴力に粉みじんとなったのであります。

教えるものが教えられる。おかしな話ですが、世の中とはこういうものなんだという勝手な結論が、多分正しい診断のようです。

(岡崎市立病院長)

今日に残る三国時代

永田 哲治



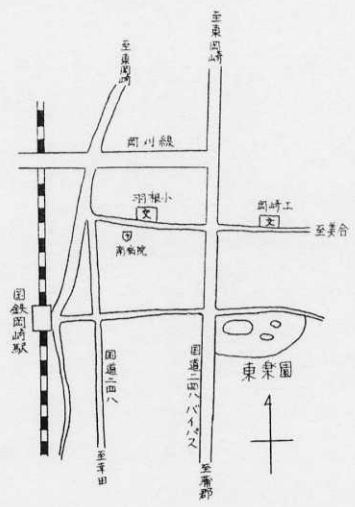
韓国は、一度行ってみたい国の一つであった。それは、国民学校時代の親友が大邱市に住んでいるからである。

この親しい国で、私自身はバカ騒ぎやバカ遊びをしに行こうなどとは初めから思っただけでなかった。それより韓国人が平均して「遠来の客」を熱烈歓迎する風習や、あいさつことばとして使っている「食事は済んだか」ということばに、長い間興味を持ち、また疑問に思いながらでかけた。今一つは「なぜ、米軍は仁川に逆上陸したのか」ということである。解答は見識ある説者にまかせることにするが、韓国の土地を踏んで、私なりにこの疑問が解けた。

さて、本年あの光州事件で、大量の戦車が南下していったであろう京釜高速道路をバスに乗って慶州市へ向う途中、タイヤのパンク事件に出会わせた。私たちは、タイヤの取り替えが終わるまで、はるかに広がる田んぼ道を散歩しながら、タニシや小魚が手でつかめる小川で一刻

若者ばかりでなく、子どもたちにとっても、東楽園はよい遊び場であった。周りの山や野原には、ギンヤンマやチョウトンボなどが飛び交い、池には、コイ・フナなどの淡水魚が数多く住み、魚つりにも最適の所であった。また、付近の小

園鉄岡崎駅から、東へ約一キロメートルのところ、三つの池（開園当時は、五つの池）を中心として、東楽園と呼ばれている地域がある。
東楽園は、大正十四年五月に開園された。この名は、もともとこの池の水辺に建てられた茶屋の屋号であり、以後この辺りの呼び名となったのである。当時は、岡崎でも有数の憩いの場とされ、矢場・ボート・屋形舟などが浮かび、日曜日などは、市内はもとより、周りの幸田・額田からも多くの若者が集まった。特に夏には、仕掛花火・芝居・映画などが催され、にぎやかであった。



—ふるさとの山河—

東 楽 園

冬になれば、十一月十五センチメートルの水が張り、スケートもできたそうである。当時は、井戸水利用であったが、池の水を割って水をくみ取り、米をとぎ、炊いて食べたそうである。

学校も遠足のコースとしてよく利用し、お茶のサービスなどもあり、多くの小学生が訪れたようである。
さて、東楽園の中心となっている池についてみてみよう。この地域によくあるように、これらの池も灌漑池として利用され、稲作の盛んな頃は、夏中、池の水が、平常の半分くらいになり、ボートや屋形舟に乗れないことがあった。また、水害の心配も例外なくあり、昭和七年の大雨の時には、池の水があふれ、水辺の茶屋などは、水の害を受けた。そのため排水路を作ることになり、これが完成後には、水害の心配は皆無となった。

昔は、池の水もとてもきれいだった。



(羽根小 岡田 幸夫)

- これらの池も、区画整理などで、一つ二つとなくなり、今は墓地や小公園になり、水も年々きたなくなるのは残念だ。
- 故郷の四季
- 一 春の桜の勝鬃寺
夏は涼しい東楽園
 - 二 秋のもみじは稲荷さん
冬の雪見は小豆坂
 - 三 交通便利なわが里は
大岡崎を玄關に
汽車に電車で省営バス
構内タクシーに青バスと
会社工場のおが里は
日清紡績、三竜社
製菓・製粉・殖産に
服部釜屋と数多し

これらのだかな国が、昔からなぜ、一朝にして為政者が変わるのか、思いを深くする者である。

ベルサイユの思い出

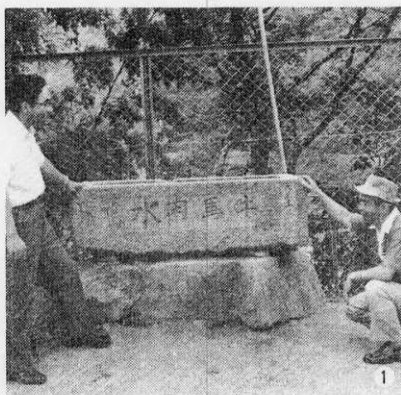
畔柳 都

あこがれのバリ、その最終日、バリ郊外のベルサイユ宮殿を訪れた。あいにく日曜日のせい、すごい人で、宮殿の中は、まるで芋の子を洗うような混雑ぶりであった。その絢爛豪華な装飾は、ルイ十四世の力をしのばせてくれる。大理石サフラン織り、すばらしい絵画、大きなシャンデリアで飾られた部屋。マリー・アントワネットは、いったいどんな気持ちで、こんなところに暮らしていたのだろうか。

立ち止まることもできず、押し出されるように外へ出ると、すばらしい庭園が目の前に開けている。出発まであまり時間がないので、急いで記念写真を撮ろうとして、よく後ろを見ないで下がった。少しの狂いもなく整えられている低い植え込みの中に片足が入ってしまいた。そこだけ小さな穴があいてしまった。世が世ならギロチンものだよ、という同行の人たちの冗談と共に、それまでの夢見心地が一度に吹き飛んでしまった。その後しばらくあいていた穴を思うと今でも胸が痛む。

(美川中)

岡崎再見

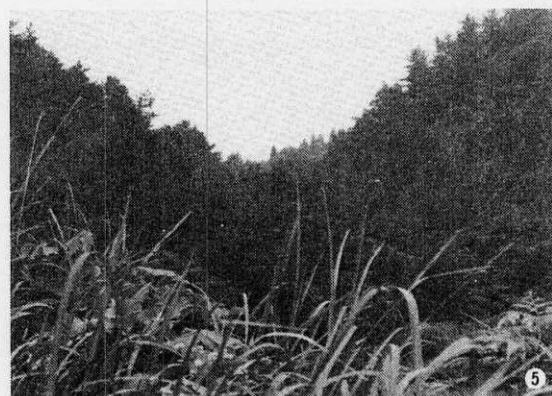


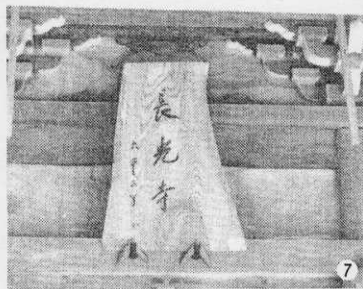
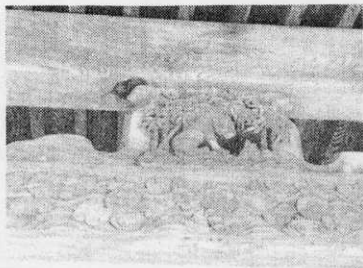
七月のある日、真夏の太陽が照りつける中を、編集委員は四台の車に分乗し、「常磐東のむかし」の著者城殿輝雄先生に案内をしていただき大沼街道をたどる。

この街道は、今でも西三河山間部と岡崎を結ぶ重要な交通路で、車の往来は激しい。江戸時代には、かなりの交通量があり、それなりの道路があったと思われるが、その様子は定かではない。

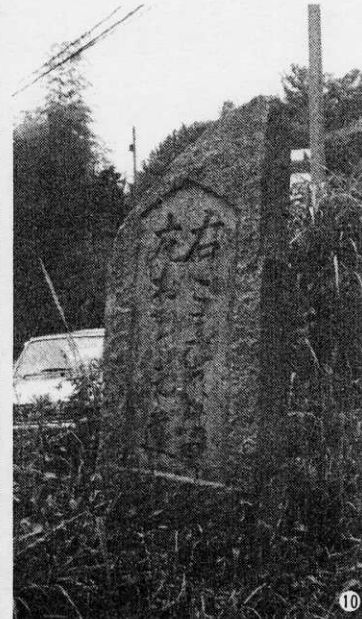
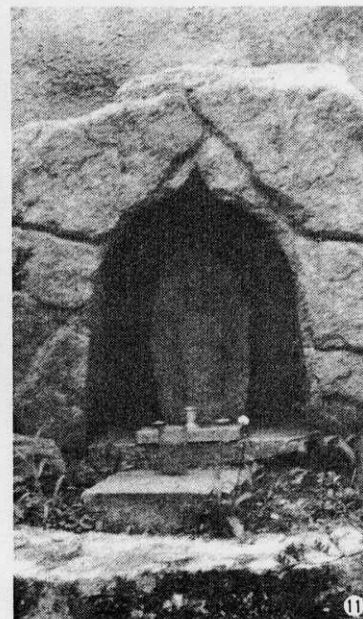
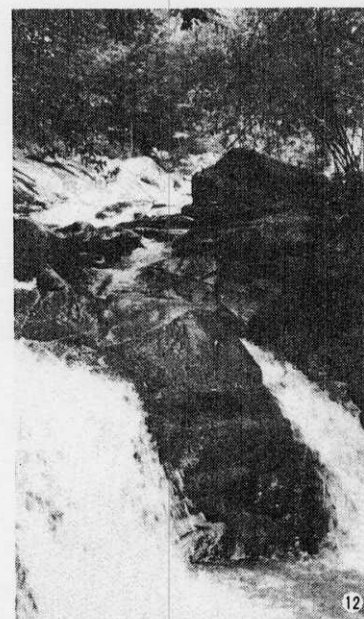
明治になってから、補修されたり新しい場所に道が作られていくが、その跡はいくつか残っていた。廃道となつて一世紀を越えようとしている今、ありし日の旅人の姿を求めざるべないだろうが、街道の歴史にまつわる秘話の数々に心をゆさぶられながら奥へ奥へと。

青木川が見え隠れする道は、滝を過ぎ米河内を通り安戸にさしかかった頃川を渡る。車を止め、深い木立の中を歩くこと二分。暗い山道のはるか下に数条の滝が見える。「あらされていないこんなすばらしい滝があるんだよ」「どうだね流しそうめんなどは、まさに絶景かなである。大柳を過ぎ、下山村へはいろいろとする辺り、のどかな田園風景を後にして山へはいる。道なき道をしばらく行くと旧街道へでる。明治中頃、下山から岡崎へ牛車で水を運ぶ近道をつくつて、たいへんもつけた人があつたと聞く。近くにみる竹におおわれた廃屋は、何も語らない。聞こえるのはせみの声とせせらぎ。そこに大沼街道の一部をかい見えた。





- ①、大沼運輸組合寄贈の牛馬用水。
- ②、バスが通った、米河内の旧街道。
- ③、旧街道沿いに残る、人家の石組み。
- ④、⑩の地藏尊のあった辻。石が旧道。
- ⑤、旅人のいばをとった「いば神」の伝説を秘める「ピンカイ峠」。
- ⑥、街道沿いのなかでも古い地藏尊。
- ⑦、昔話で有名な、「長光寺のとら」。
- ⑧、明治二十二年、西本願寺の二法主を迎えるための街道大改修の掛け図。
- ⑨、岡崎へ氷を運んだ道も今は。
- ⑩、石こまだちははず、左おかざき道。明治四十四年の道標。
- ⑪、見返橋のたもとにある地藏尊。
- ⑫、牛落しの下を流れる「・の滝」。



教育日々



せんせい、ありがつれたよ

三島小 二瓶昭子

「朝、学校の運動場で、とても力持ちさんを見つけたのよ。何だかわかる。」

不思議そうな子供たちの顔。ありがみみずをひっぱっている絵を黒板にはる。



「ぼくも見たことあるよ。」

「わたしも……………」

「今日のテレビのきくちゃん、みるちゃん、なんだろう君もみんなと同じようにありを見つめます。さあ、見つけてどうするのかな。」

テーマソングに合わせて歌声が響く。登場する人形が自分の分身でもあるかのように、人形のせりふに對してつぶやく。

「ひげじゃないよ。虫なんかつかむのだよ。」

「餌を運んでいるんだよ。冬もりをしているんだよ。」

いつになく熱心なK君は、

「先生、ぼくたちもなんだろう君たちみたいに、ありをつかんで巣をつくるのを見ようよ。」

と、突然手を上げて提案した。聞いていた子たちも文句なく賛成。

「用意するものは、土を入れる水槽と糸とえさ。」

「糸?。」

K君の言葉にクラスの子の不思議そうな顔。

「ありの巣を見つけて糸の先にえさをつけて、たらしてありを釣るんだよ。」

水槽と糸とカステラを用意し、運動場に出た。

「あ、ありがいたよ。」

「先生、木の下にあり地獄があるよ。」

「つれたつれたよ。ほら。」

思い思いの場から、子供の歓声が聞こえてくる。腕白小僧のK君、今日は、ちよつぱり得意だ。

「土はやらかい方がいいよ。」

「ちがう所のありを入れると、けんかをするよ。」

と、クラスの子に教えている。

「三十九人が協力をしてカステラで釣ったありさん、早く巣を作ってね。」そんな願いをこめて黒い紙で水槽を覆い果のできる日を待っている。

鄭君のこと

葵中 倉橋 正博

ただたどしい口調、やや逸脱したイントネーションで、

「僕達三組の美しいハーモニーをお聞き下さい。」と、クラス紹介をやり終えた時、今までの静寂が突然破られ、われんばかりの大きな拍手にかわる。私は、

安堵感を抱くと共に、心潤むのを覚えながら、わがクラスのハーモニーに耳を傾ける。

十一月初旬に催された校内音楽会。クラス代表として、今紹介を終えたのが、六月下旬に韓

国のソウル中等中学校から転校したばかりの鄭海元君だ。僅か五か月余りで、四百名の生徒を前に堂々と日本語を話すほどに成長した彼は、立派だと思つた。

転校した当初は、知っている日本語は皆無に等しい。挨拶の時、「こんにちは、チョンですどうぞよろしく。」と、必死で覚えてきたであろう言葉をはにかんで言ったのを覚えている。そんなふうだったから、授業についていけないだろうか、異国の地で、日本の友と葛藤も起こさず

に生活していけないだろうか、と、大いに危惧したものだ。が、そ

れが全くの杞憂に終わったのは彼の人並み以上の努力の結果だ。天性の明るい性格で、積極的に学級の輪に加わり、韓国の歌を披露したり、韓国語を教えたりして笑いの渦をつくった。また、小学一年から六年までの漢字テキストを驚くほどの速さでこなしたり、日曜ごとに自転車

を乗り回し、岡崎の地理を早く覚えようとした。そんな彼のたゆまぬ努力を一番理解していたのは、学友である。鄭君がいかにみんなから慕われていたかを示すものは、校内音楽会を控えたある日の学級会である。

「鄭君が日本へ来てからの努力はすごい。それにクラスの団結もずつと強められたと思う。」

「鄭君をまだはつきり知らない友だちも多い。鄭君にクラス紹介をやってもらった方がいいと思います。」

満場一致でクラス紹介者に推薦された。全く知らない土地でひとり歩きしている姿が、生徒の心を打ったからに違いない。鄭君の真剣な姿は、教師のどんな助言よりも、大きな意味を持っていると思う。

「先生、ありがいたよ。」

「先生、木の下にあり地獄があるよ。」

「つれたつれたよ。ほら。」

思い思いの場から、子供の歓声が聞こえてくる。腕白小僧のK君、今日は、ちよつぱり得意だ。

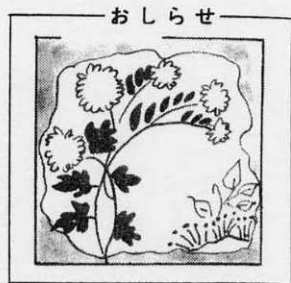
「土はやらかい方がいいよ。」

「ちがう所のありを入れると、けんかをするよ。」

と、クラスの子に教えている。

「三十九人が協力をしてカステラで釣ったありさん、早く巣を作ってね。」そんな願いをこめて黒い紙で水槽を覆い果のできる日を待っている。





中学生ウツデバラ親善使節に

長坂君（城北中）と安藤さん（東海中）

● 国際化時代を迎え、未来の岡崎を背負う児童生徒に夢と希望をもたせ、国際的視野に立って、郷土の発展を考える有為の市民育成のため、市内の中学生を海外に派遣する。

● 郷土岡崎の文化、教育、経済のようすを広く海外に紹介し、また外国の風俗、習慣、ものの見方、考え方を知り、国際的な視野に立つ豊かな教養を身につけた市民意識の高揚につとめる。

● 姉妹都市ウツデバラの児童生徒との交流を深め、歴史を積み重ねてきた都市交流の確かめあい、さらに新たな文化交流の場とする。

【寄贈刊行物・資料等】
● 愛知県の近世社寺建築
— 近世社寺建築

緊急調査報告書

愛知県教育委員会

B 5版 二二頁

● 狸と日本人 井上友治著

黎明書房

旅行記念の民芸品集めから

の魅力に憑かれた著者が、日本古来の民話や伝説などから、狸文化を眺めたユニークな書

A 5版 二〇三頁・二五〇円

● みどりは友だち

岡崎市立根石小学校編

B 5版 五〇頁・ガリ版印刷

● 学生姉妹都市親善使節団に二人の中学生が選ばれ、スウェーデンのウツデバラ市を訪問することになった。

● 二人は長坂省君（城北中三年生徒会長）、安藤美智恵さん（東海中三年・生徒会副会長）で、ウツデバラ市内の児童生徒代表との交歓会や意見交換などをし、親善交流を深める。

● 尚、付添い教員として、藤田吉信教諭（英語科指導員・矢作中）が同行する。

● おもな日程は次のとおり。

九月五日 東京発

“ 六日 コペンハーゲン

“ 七日 ストックホルム

“ 八日 ウツデバラ

“ 十日

● 中学校東海地区体育大会

八月十・十一日 於静岡県

▽バレーボール

男一竜海・矢作 女一南

▽剣道 女一甲山

▽陸上競技

男一甲山（四百米）

美川（百米・低四百R）

東海（走幅跳・砲丸投）

女一美川（一年百米）

岩津（百米日・走高跳）

● 小学校東海四県バレーボール

大会 八月三日 於三重県

優勝（男六人制）六ツ美南部

優勝（女九人制）六ツ美中部

●第33回 岡崎市中学校市長杯総合体育大会兼西三河中学校選手権大会岡崎・額田支所予選会 55.7.21~7.31

〈市長杯総合成績〉

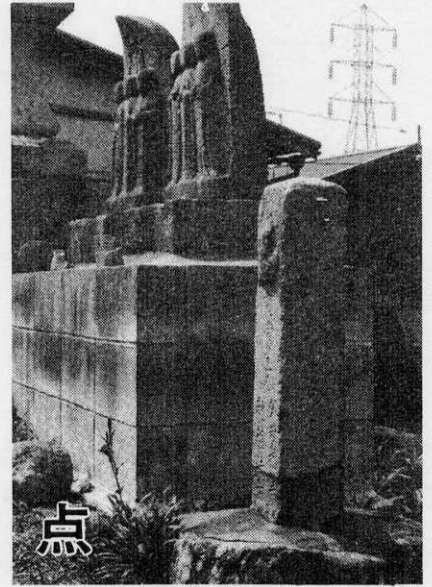
| 種目 | 性 | 優勝 | 2位 | 3位 | 位 |
|----------|---|-----|-----|--------|---|
| 軟式野球 | 男 | 葵 | 幸田 | 城北・東海 | |
| ソフトボール | 女 | 幸田 | 岩津 | 葵 | |
| 軟式野球 | 男 | 福岡 | 附属 | 甲山・六ツ美 | |
| | 女 | 福岡 | 矢作 | 甲山・東海 | |
| 卓球 | 男 | 幸田 | 河合 | 南・六ツ美 | |
| | 女 | 六ツ美 | 南 | 東海・幸田 | |
| バレーボール | 男 | 矢作 | 幸田 | 竜海 | |
| | 女 | 美川 | 福岡 | 南 | |
| バスケットボール | 男 | 美川 | 葵 | 城北・六ツ美 | |
| | 女 | 幸田 | 城北 | 甲山・東海 | |
| ハンドボール | 男 | 六ツ美 | 美川 | 葵・城北 | |
| | 女 | 美川 | 六ツ美 | 葵・岩津 | |
| 剣道 | 男 | 幸田 | 矢作 | 甲山・城北 | |
| | 女 | 福岡 | 附属 | 甲山・葵 | |
| 体操 | 男 | 葵 | 甲山 | 竜海 | |
| | 女 | 南 | 甲山 | 美川 | |
| 水泳競技 | 男 | 矢作 | 甲山 | 福岡 | |
| | 女 | 美川 | 甲山 | 竜海 | |
| 柔道 | 男 | 矢作 | 甲山 | 海 | |
| | 女 | 六ツ美 | 葵 | 東海 | |
| 陸上競技 | 男 | 矢作 | 葵 | 東海 | |
| | 女 | 六ツ美 | 矢作 | | |

| | 1位 | 2位 | 3位 | 4位 | 5位 | 6位 |
|------|----|----|----|-----|-----|-----|
| 男子総合 | 矢作 | 葵 | 甲山 | 城北 | 六ツ美 | 竜海 |
| 女子総合 | 矢作 | 甲山 | 葵 | 東海 | 南 | 六ツ美 |
| 男女総合 | 矢作 | 甲山 | 葵 | 六ツ美 | 東海 | 竜海 |

- 第7回 岡崎市小学校球技大会
- 第19回 岡崎市小学校ソフトボール大会
- 第18回 岡崎市小学校水泳競技大会

〈成績〉

| 種目 | 性 | 優勝 | 2位 | 3位 | 位 |
|----------|---|------|-----|---------|---|
| バレーボール | 男 | 六ツ美南 | 六名 | 矢作北・藤川 | |
| | 女 | 六ツ美中 | 竜美丘 | 男川・岡崎 | |
| バスケットボール | 男 | 愛宕 | 井田 | 竜美丘・矢作東 | |
| | 女 | 三島 | 城南 | 愛宕・矢作東 | |
| サッカー | 男 | 常磐 | 岡崎 | 羽根・大樹寺 | |
| ソフトボール | 男 | 六名 | 根石 | 津・六ツ美北 | |
| | 女 | 岩津 | 広幡 | 羽根・愛宕 | |
| 水泳競技 | 男 | 矢作南 | 井田 | 根石 | |
| | 女 | 井田 | 矢作南 | 三島 | |



所在地—岡崎市羽栗町

羽栗の道標

市内東部羽栗町の入口、県道幸田—池金線の路辺にひっそりと建つこの道標。

村内の安全を願う常夜灯と二体のお地藏さんが寄り添うように建てられている。

右—あかさかみち

左—ふじかわみち

と刻まれたところを見ると北海道の道しるべであったと思われるが長い歲月、風雪にさらされて、どこにあったか、いつのころのものかさだかではない。土地の古老に尋ねてもはつき

りしたことはわからない。ただ旧街道の羽栗・桑谷への三差路にあつて東海道との道しるべとしたことは想像される。

そばを流れる狭い田の用水の音と月見草の数株が昔日の名残りを知っているようか。

道路の拡張と車社会が、この道標を無用のものとして路傍の一端へ押しやってしまった。人の営みを知ってか知らずか道標の文字面は、よくよく見ないと読みとることができない。

この本を

- | | |
|-------------|-----------------|
| ○何を書くかどう書か | 板坂 元 |
| 光文社 | ¥ 580 |
| ○旅は道づれガンダーラ | 高峰 秀子 高松山 善三 |
| 潮出版社 | ¥ 1,200 |
| ○日本語最前線 | 毎日新聞社集 |
| 毎日新聞社 | ¥ 920 |
| ○アメリカと日本 | 江崎玲於奈 |
| 読売新聞社 | ¥ 1,200 |
| ○小林一茶 | 井上ひさし |
| 中央公論社 | ¥ 850 |
| ○ペスタロッツ | 成瀬 政男 |
| 雇用問題研究会 | ¥ 1,000 |
| ○サルが目ヒトの目 | 河合 雅雄 |
| 平凡社 | ¥ 1,300 |
| ○孤独な教室 | 望月 一宏 |
| 朝日新聞社 | ¥ 680 |
| ○狸と日本人 | 井上 友治 |
| 黎明書房 | ¥ 2,500 |
| ○一図書館の由来記 | 栗本 和夫 |
| 中央公論美術出版 | ¥ 1,200 |

岡崎再見で大沼街道を探索して往時の旅人の苦勞を味わおうとした。小丸からピンカイ峠へ向かう。谷間のわずかな土地を見出して耕地にした田畑もがまの穂や雑草が生い茂っていた。峠への道も背丈を越す夏草のため断念せざるを得なかった。谷渡りする、うぐいすの鳴き声がいつまでも耳に残った。

オアシス

あつという間に過ぎた夏休み。元気な子どもたちが再び教室にやってきた。日焼けした顔、たくましくなった顔で。どんな毎日を送ったかはくわしくはわからない。つらい、厳しい休みを送った子もいよう。それが、「きつとプラスになるのだよ。」と、よい思い出として残してやりたいものだ。

「しばらく。ちつとも変わってないわ。先生。私二人の親、お手あげ。」入学式から二日間、大声をあげて泣いたMちゃん。思いきってランドセルを背負わせて帰宅させた。翌日泣かずに元気よく登校して来たのを見て涙が出たの思い出す。いいお母さんになったMちゃん。入学時を思い出してはにかんでいた。

涼しい夏。燃えぬ太陽。天然夕し。でも仕掛けられたようなこと。の日本列島。木々で鳴くまぜみのやけつような声も少ないようだ。いったいどうなってしまったのだろうか。休みの終わりに近いような涼しさに、あせりすら感じる。しかし、宿題はいっこうに手につかず……

●カット

緑丘小 佐野 達美